

文化財センター通信

【かざぐるま】

風 車

第 37 号



紀州の歴史と文化の風

財団法人 和歌山県文化財センター

第2回

紀三井寺 文化財建造物の 保存修理

塗装調査からわかったこと-1



昭和修理前の多宝塔古写真（川崎市立日本民家園提供）
故大岡実博士撮影のガラス乾板写真です。垂木や支輪の間は黒っぽく写っており、現状の白色胡粉塗りとは異なります。

平成十八年十一月より平成二十年三月までの予定で、紀三井寺（護国院）の重要文化財建造物、多宝塔、鐘樓、楼門の保存修理工事が行われていきます。これら三棟の現状塗装は、いずれも昭和時代に文化財として保存修理された際に、塗り直されたものでした。しかし調べてみると、それは単なる塗り直しでなく、大きく変更されていることが明らかになってきました。

多宝塔の塗装調査

多宝塔の現状塗装、つまり昭和二十六年修理の塗装は、主要木部を丹塗（朱

色）、肘木や垂木端を黄土塗（黄色）、壁板、軒天井板、化粧裏板を胡粉塗（白色）とするものです。

多宝塔の塗装を修理のために掻き落としてみると奇妙なことに、違う色が現れました。現状塗装は、かつてと配色が異なっているのです。

多宝塔は前回の修理で修理工事報告書が刊行されています。また奈良文化財研究所と日本民家園大岡文庫には、修理前の古写真が残されています。白黒ですがこれらを見ると、修理前の支輪裏板や化粧裏板、板壁の配色は、現状と異なることが確認できました。



多宝塔上層の塗装掻き落とし状況
昭和修理の番付札のあたり面に旧塗装が見えます。昭和修理で部材は入念に洗われたようですが、番付札を外さないで洗ったため、幸いにして残ったようです。

報告書では、赤色塗装の修理前仕様を弁柄塗、実施仕様を丹塗と記します。つまり鉄主体の弁柄塗から、鉛主体の丹塗に変更されたのです。確かに現状丹塗の下には、弁柄らしい濃い赤色塗装が現れました。

— 第 37 号の主な内容 —

1. 紀三井寺 文化財建造物の保存修理
第2回 塗装調査からわかったこと-1
2. 文化財建造物課新人紹介

◎重要文化財福勝寺保存修理工事事務所◎
649-0144 海南市下津町橋本1065番地
tel./fax. 073-494-0312

◎重要文化財旧中筋家住宅保存修理工事事務所◎
649-6324 和歌山市栴直148番地
tel./fax. 073-477-5969

た古材数点が、屋根裏に保管されていました。注目すべきことにこの古材は、昭和修理で再利用しなかったもののみならず、江戸時代の修理で小屋材に転用されていたものも含まれていました。つまりは江戸修理以前の塗装が残されていたのです。

これらの赤色塗装について、元素を電子顕微鏡の元素分析装置で見ってみました。まず現状塗装を分析すると、鉄は無く、鉛が多量に検出されたので、報告書通り丹塗とわかります。つぎに保存古材のうち、地隅木を計測しました。これは当初材で、江戸修理で枯木枕に転用、昭和修理で外され屋根裏に保存されたものです。これは鉄が検出され、若干の鉛も見られました。この塗装は弁柄塗と考えられますが、鉛も若干あるので、弁柄に丹を混ぜ込んだか、または複数回の塗装成分が重なって出ている可能性があります。

昭和修理前の赤色塗装は、当時の番付札のアタリ面に良く残っていました。この塗装は、サンプル片が採取できず分析出来ませんでした。先の報告書から弁柄塗と考えられます。

肘木や垂木端は、現状の黄土塗の下に赤色塗装が見えていますが、昭和修理前の写真には白っぽく写っており、昭和修理前も現状と同じように黄土塗と考えられました。

下層の壁板、上層の壁板、上層頭貫は、現状胡粉塗の下に、黒色塗装が見えました。これは修理前写真でも確認され、壁が黒っぽく写っています。この黒色は墨塗と考えられました。

上層の小壁は現状が胡粉塗ですが、番付札のアタリには赤色塗装が見られます。ここは弁柄塗であったと考えられます。軒支輪の裏板や垂木間の化粧裏板は、修理前写真に濃色塗装がなされているのが見えるので、赤色、つまり弁柄塗であったと考えられます。

小結

これらをまとめると、昭和修理前は板壁を墨塗とし、その他は全て弁柄塗とするものであったようです。しかし昭和修理によって、丹塗と胡粉塗を組み合わせる仕様に変更されたことがわかります。次回ではなぜ塗装が変更されたのか。その背景について考えてみたいと思います。

(御船達雄)

文化財建造物課 新人紹介

今年度は当課に4名の新たな職員が加わりました。誌面で自己紹介します。

▼新人ですが今年で三丁路の鯉人です

下津健太郎

5月より文化財建造物課に採用されました。下津健太郎です、よろしくお願ひ致します。現在、海南市下津町にある福勝寺本堂・求聞持堂・鐘楼の保存修理工事において現場監理と図面作成の仕事をしています。日本の文化や伝統を継承して来た建物を後世に伝えて行く、という立場に責任とやりがいを感じております。

高校までを奈良で過ごし、そのせいもあってか考古学に関心を持ち、その一方で来る日も来る日も野球に打ち込んでいました。そんな僕が文化財建造物の保存修理に関わることになったのは、高校2年の時に西岡常一氏の本に出会ったことがきっかけです。当初は宮大工に憧れていたのですが、ある日ふと、宮大工の仕事を学術的に評価してみたいな、と思うようになり、京都

大学へ進学しました。大学では建築構造学を専攻し、伝統的木造建造物の耐震性能に関する研究に従事しました。その時分に、史跡和歌山城御橋廊下の復元工事に関する構造実験にも参加しました。

卒業後も1年余りNPOにて登録文化財を目指す建造物の調査や構造補強設計をおこない、木造だけではなくコンクリート造やレンガ造にも携わりました。そして、3年前からは財文化財建造物保存技術協会で御世話になり、平城宮跡第一次大極殿正殿の復元工事に携わって来ました。その中で工事監理だけではなく、(独)国立文化財機



自称鯉人の下津さん

構 奈良文化財研究所（以下「奈文研」）による研究成果を基に、屋根工事や金具工事、左官工事における古代の仕様を実施に反映させるべく、奈文研との共同研究もおこなわれました。とりわけ瓦の製作は、原土の調査から焼成に至るまでの一連の工程について、奈文研の研究者や瓦職人と試作検討させていただき、貴重な経験となっています。

先人達が如何に建物を組み立て、また修理して来られたか、その意思をさらに探求し、職人の方々と共に次の時代へしっかりと伝えて行く、という思いを持ち続けて頑張りたいです。

【追記】私は広島東洋カープのファンで、関西では珍しいほうだと思います。表題の「鯉人」は、鯉ⅡCARPつまり「広島東洋カープをこよなく愛する人」という意味の造語です。こちらもひとつよろしくどうぞ。（文化財建造物課技師）

▼文化財に巡り会って

結城啓司

はじめまして。結城啓司と申します。今年5月より和歌山県文化財センターの文化財建造物課に技師として採用し

て頂き、現在海南市下津町にある重要文化財福勝寺の修理事務所にて修理に伴う調査や図面作成をしています。

文化財センター職員としての経験はまだ3ヶ月ほどですが、福勝寺には2年前の2005年4月から調査補助員としてほぼ現在と同じ内容の仕事をしてきました。この間は大工さんの手元や足場の組立から部材運び、現場清掃などの雑務等も仕事の一部でした。これらの仕事は確かに肉体的には厳しいものでしたが、センター職員となった今では現場の方々がどのような気持ちや考えで働いているのかを知るよい機会になったかと思っています。付け加えるなら、よく言われるような現場と事務所の考え方の違いというものを肌で感じるよい機会にもなりました。

話が前後してしまいますが、私は今、文化財修復の専門員としてこのような場で自己紹介をしていることに不思議な思いがあり、また同時に多くの巡り合わせを感じずにはいられません。私は大阪で生まれ育ち、京都府立大学に進学し建築を学びました。専門は主に町屋や民家などの日本建築史です。建



福勝寺の図面を描く結城さん

築を志す以前より日本の伝統建築・技術に魅力を感じていたこと、また世界に誇る木造建築を育んだ日本の気候風土は現在に於いても大きく変化していないので、建築と関わっていく上で伝統建築を学ぶことはとても意義深いことだと感じ、建築史を専攻しました。その後、縁があつて福勝寺で初めて文化財建造物の修復に関わることとなり、その魅力に取り憑かれ始めた矢先にまたまた縁があり、ついに文化財修復を生業とすることになりました。

現在私の職場であり、また教師でもある福勝寺保存修復現場の工事が大詰めを迎えています。大工さんを始め各

業種の職人さんや我々設計監理者、役所関係者、地元の方々、そして見守って下さっている皆様方の想いを乗せてどのように仕上がっていくのか、責任感と共に期待が膨らみます。今後ともよりいっそう精進に励む所存です。で、よろしくお願ひ致します。

（文化財建造物課技師）

▼旧中筋家住宅修理事務所より

増野真衣

五月から当センターの非常勤技術補佐員として働かせていただいております。増野真衣です。担当の現場は和歌山市禰宜にある重要文化財・旧中筋家住宅です。平成十七年三月に関西大学工学部建築学科を卒業し、その年の十二月から和歌山市のアルバイトとしてこの中筋家で働かせていただいております。その経験を含めると中筋家での業務期間は一年半になります。担当の現場は変わりませんが、これからは文化財センターの一員として気持ちも新たに頑張っていこうと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

中筋家での私の主な業務内容は保存図の作成です。これは修理の完了時に発行される報告書に掲載される図面でもあり、修理が終わった後も永年保存される重要な資料でもあります。保存図を作成する手順としてまずは資料をもとにしながらパソコン上で図面を書き、全体の構成を決めていきます。構成が決まったらA0版（セロ）のケント紙にペンシル書き（下書き）をし、最終的には烏口と呼ばれる製図道具で墨入れをして完成となるのですが、現在の作業はペンシル書きを進めている段階です。正確さや集中力が必要な仕事ですが、これまでに中筋家で保存図や資料の作成に関わってきた人たちの想いが詰まった図面が墨入れされて、今後永久に保存されていくのだと思うと、そのほんの一部にでも携われていることを誇りに思います。

今年度で旧中筋家住宅の保存修理は八年目に入り、今年は一부를除いて素屋根（工事用の仮設の屋根）の解体が始まります。素屋根を解体すると、かつて大庄屋として栄えた中筋家の姿を外部からも眺めることが出来るように

なりますので、ぜひ近くを通る際はその姿を眺めてみて下さい。
（文化財建造物課技術補佐員）

▼はじめまして

大嶋奈美

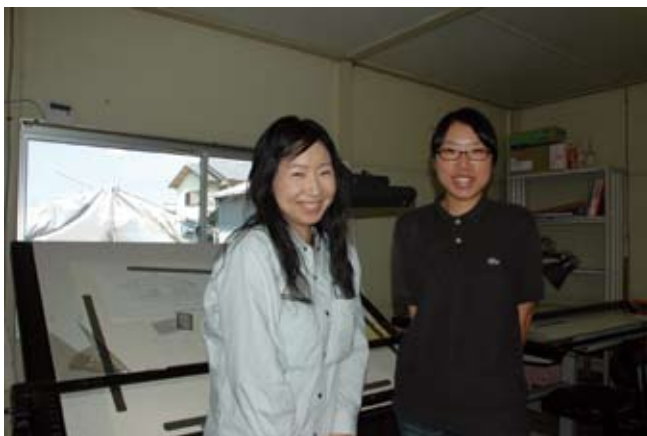
この春、新潟県にある長岡造形大学環境デザイン学科を卒業し、四月十九日より文化財建造物課の非常勤技術補佐員として、旧中筋家修理事務所でお世話になります、大嶋奈美と申します。大学では文化財建造物コースで、歴史的な建物の活用や町並みを守ることに、それに関わる人達について学びました。学校の課題はもちろんですが、実際の現場に出て、建物調査などにも参加する機会がいくつもありました。その中でも特に、群馬県桐生市での町並み調査に参加したことは、自分にとつてとても良い体験だったと思っています。調査に参加した大学の仲間たちと一緒に、夏の暑い日も野帳図面の作成や編集作業を頑張り、一冊の冊子にまとめることができました。この小さな冊子は、伝統的建造物群保存地区選定への一助となったと聞いていま

す。また、この町に住む皆さんと一緒に、町の良さや歴史的な建物を再確認する事ができたと思います。
新潟から和歌山へ引っ越して来てから、早いもので四ヶ月が過ぎようとしています。初めは、生活の違いで戸惑うことが少しありましたが、現場の皆さんと交流を深めていくうちにそんな不安はいつの間にか消えていきました。今では和歌山のことももっと知りたいと思っています。長岡を離れるときに、研究室の先生からいただいた、和歌山県文化財マップを片手にあちこち訪ねているところです。

中筋家の現場では、主に保存図の作成やCAD図面の編集を行なっています。保存図の作成は、最初は細かい図面を上手く描くことができず苦戦しましたが、今では少しずつですが慣れてきています。また、他の現場へも調査に呼んでいただいたりと、日々勉強させていただいています。

現代の私達は、歴史的建造物を未来へと伝えるべく、建物を深く理解する事が大切だと思います。これから先、常に文化財に携わっている者として意

▼ 旧中筋家住宅修理事務所にて 左が増野さん、右が大嶋さん



識を持ちながら仕事をしていきたいです。宜しくお願い致します。
（文化財建造物課技術補佐員）

風車 第37号

平成19年10月9日発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404 和歌山市湊571-1
tel.073-433-3843
fax.073-425-4595
e-mail maizou-1@wabunse.or.jp
<http://www.wabunse.or.jp>